

ハリル・イナルジュク

詩人とパトロン：

家産国家と芸術についての社会学的研究

宮 下 遼

本書は16世紀オスマン朝における詩人とパトロンの関係、その実態を社会学的观点から明らかにしようとする研究である。トルコにおけるオスマン史研究は、本書の著者イナルジュク (Halil İnalçık) やファローキー (Suraiya Faroqhi) などの社会経済史家によって先導されてきた。その一方で、帝国の発展と共に花開いた芸術文化、特にその中心となった古典文学について、歴史家が大きな関心を払うことはなかったと言える。古典文学研究は専ら文学(史)の分野で扱われてきたのである。その文学(史)研究の領域では、文学作品の整理や校訂、出版、その文学的解釈、伝記研究を除けば、通史や辞典の編纂が中心に行われてきた。例えばクト (Günay Kut) によるトルコ各地に散らばるテキストの整理、レヴェンド、バナルルの優れた文学通史(1)などと共に、著名な文筆家、詩人に関する伝記研究、テキスト研究において成果が挙げられてきたが、いずれの研究も歴史学との乖離は著しかった。同じオスマン朝という時代を扱いながら、トルコにおける文学(史)研究と歴史研究の間には大きな隔たりが存在しているのである。

オスマン朝の支配者階層、知識階層が等しく詩の教養を身につけていたことを考慮に入れるなら、歴史学における古典文学史料の重要性は言うまでもなく、歴史研究と文学(史)研究の成果を統合するような体系的な研究が模索されるべきであろう。そうした現状を踏まえて、本書は歴史学、著者の言を借りるなら「社会学的研究」の立場から文学作品を史料として積極的に活用している。別けても著者は、史料が豊富で、一定の研究蓄積のあるディーワン詩 (d i v ā n ş i i r l e r i、宮廷詩)を中心に、両分野間の空隙を埋めるような意欲的なアプローチを行っている。

著者のハリル・イナルジュクは、オスマン史研究の世界的第一人者であり、多年にわたって第一線で活躍する研究者である。1942年にアンカラ大学の言語・歴史-地理学部で「タンズィマートとブルガリア問題」(2)と題した博士論文で学位を取得し、同学部やシカゴ大学で長く教授職にあり、現在はビ

ルケント大学で教鞭を取っている。これまでは検地台帳などの文書史料に依拠した実証的な社会経済史研究で知られ、文学（史）研究の領域に踏み込んだ研究は1974年に発表した雑誌論文のみである⁽³⁾。主に詩を中心史料として扱った本書では随所に関連する詩を引用され、著者の膨大な業績の中でも目新しい研究となっている。

本書の紹介に入る前に、オスマン朝の詩芸術全般について概観しておきたい。イスラーム世界では詩が芸術の中心的な役割を果たしてきた。本書が扱う16世紀オスマン朝でも、スルタンや各高官を初めとして、読み書きを習った者の多くは詩の教養を備えることが望まれ、詩人が芸術、文化の担い手たり得る素地が存在していた。オスマン朝の詩人たちはスルタンや高官、その他の支配者階層が催すメジリス（meclis、文化サロン）に集い、作品を披露し献呈することで時の有力者の庇護を得ようとした。パトロンを得ることで金品、衣服などの下賜を受け、また官職を安堵してもらうことができたためである。その中でもスルタンの寵愛と庇護を受ける詩人は「詩人たちのスルタン」（sultânu'ş-şu'arâ）として詩人たちの羨望と尊敬を集めた。オスマン朝ではこうしたパトロンへのインティサーブ（intisâb、出仕、または仕官）とそれに伴う社会上昇システムが一般的であったとされるが、管見の及ぶところでは、歴史学の領域で詩人とパトロンの関係を体系的に扱った研究は見当たらない。文学（史）の領域でも、詩人とパトロンの交歓については伝記研究に内包される形で多少の言及がされてきたが、本書のように両者の関係に主眼を置いた研究は皆無と言ってよい。

本書は全6章で構成され、第1章から第3章までが当時の詩芸術とその背景説明に当てられ、導入部に相当する。第4章以降は各々別個の史料から論ぜられ、結論に相当する章は見当たらない。

第1章「家産国家と芸術」では、オスマン朝の芸術の在り方が定義される。著者の特徴は、家産国家における社会的な枠組みが芸術にも適用されていたとする点である。つまり、家産国家であるオスマン朝では高度な文化とは宮廷文化と同義であり、帝国の支配者階層と不可分のものであった。そのため芸術と国家の発展が同時に進行したとことを家産国家における芸術の特徴と定義している。その大枠を踏まえて著者は、「出仕者と擁護者の関係」（intisâb ve patron ilişkileri）が、オスマン朝における人的関係の社会的機軸をなすとして、詩人とパトロンの関係についても同様の見地から論を進めていく。著者によると、「出仕者と擁護者の関係」における詩人とパトロンは、「名声と誉れ」（nâm u şân）の一致という相互補完的な関係を結んでいた。つまり、支配者階層の人々は詩人を庇護することで、自分の名声が詩によって高められることを望む一方、詩人たちにとってもパトロンの栄達が自身の社会

的地位の上昇に繋がっていた。特に詩人にとっては、詩による栄達の殆ど唯一の方法がパトロンの寵愛を得て、その「お抱え」(musâhib)になることであった。著者は、詩人とパトロンの間の「出仕者と擁護者の関係」が「名声と誉れ」の双方向性を持つことを主張しつつも、相対的に詩人の立場が弱いものであったとしている。その詳細については第4章以降で触れられる。

前章を受けて第2章「オスマン朝宮廷文化の発展とオスマン朝のディーワーン詩人」では、オスマン朝の詩が「修飾の言葉」(zîver elfâz)としてのペルシア語、そしてペルシア詩の影響を多大に受けたとする文学(史)研究の立場をほぼ踏襲し、その発展過程を簡単に概観した後、章末の小章「カスィーデの献上と酒宴メジリス」で、詩人とパトロンの交流の場として機能していたメジリスを、関連する詩の引用と共に考察する。著者は、宮殿で開かれる大規模な「宮廷の祝祭」(sûr-ı hümayûnlar)などのメジリスに言及した詩に詠まれた「酒の給仕係」(sâkî)や「酩酊」(mest)といった用語は、神秘主義的なメタファーではなく実際の酒宴の様子を謳っていると明言し⁽⁴⁾、オスマン朝のメジリスが、古代ペルシアやセルジューク朝の文化サロンの伝統と共に、トルコ・モンゴルの酒宴文化を受け継ぐ形で成立、発展し、酒宴と文化サロンを兼ねた酒宴メジリス (işret meclisleri) であったとする。

メジリスの地方的な広がりについても言及される。メジリスを介して地方から宮廷に栄達を遂げたセイード・ロクマン (Seyyîd Lokman) の例を挙げ、地方出身者でもパトロンを得ることが出来れば宮廷に上がる機会が用意されていたとしている。その上で著者は、メジリスとそれを支えるパトロン制が、政治的な人的ネットワークに便乗する形でオスマン朝の文化発展に大きな役割を果たしたと評価する一方、パトロンの「お抱え」はパトロンの金銭的管理下に置かれ、詩作や生活がパトロンの意思に左右されるという不安定さも指摘している。

第3章「パトロンと古典詩における芸術観」では、16世紀当時にパトロンや詩人が好んだ詩の傾向について考察し、パトロン、詩人双方において「修飾と詩想」(tasannu' ve hayâl) に対する嗜好が顕著であったとする。その上で、「詩想を散りばめた修飾」(hayâl-âmiz tasannu') の名手とされたザーティー (Zâtî) を例に取り、彼を西洋的な自然主義、リアリズムの観点から否定的に評価した共和国初期の研究者たち (Fuad Köprülü, Abdülbaki Gölpınarlı など) のナンセンスを指摘する。イスラーム文明の中で発達した固有の「詩の技芸」(sanâyi-i şî'rîye) としてディーワーン詩を読み解くべきというのが著者の主張である。

第4章「詩人列伝における詩人とパトロン」では詩人列伝 (şu'arâ tezki-herleri) が基本史料として用いられ、16世紀オスマン朝の列伝作家の中でも

特に有名なセヒー (Sehî)、ラティーフィー (Latîfî)、アーシュク・チュレビー (Âşık Celebî)、クナルザーデ (Kınal-zâde Hasan Paşa) らのパトロンについての意見が紹介される。著者自身、4人の意見を紹介するに留め、具に検討している訳ではないが、パトロンによる庇護の必要性を強く訴えている点、詩芸を解さないパトロンを厳しく批判している点で共通しており、当時の詩人たちがパトロンの必要性を強く認識していたことが窺える。

章末の小章「職業から見た詩人たち」では、先に用いた4点の詩人列伝から詩人たちの身分的出自と職業について短い考察を行う。著者は、民間詩人や軍人階層出身者などの若干の例外はあるものの、詩人たちの多くはメドレセの出身であり、文学の基本的素養に加え、書記術などの実務的技術も体得していたことに着目し、多くの詩人が書記職の徒弟制の中から頭角を現したとする。従来の文学(史)研究では詩人の「詩人」としての側面に主な力点が置かれてきたが、著者はここで、パトロンの庇護の下でワクフ管財人やイマーレットの書記などの実務職に就き、定収入を得ながら詩作を行うという詩人像を提示している。

第5章「フズーリーとパトロン制」では、トルコ語抒情詩『レイラーとメジュヌーン』の作者として知られるバグダードのチュルクメン人詩人フズーリー (Fuzûlî, 1480~1556年) を取り上げ、パトロン獲得に奔走したその半生について考察する。特にフズーリーを取り上げた理由には触れられていないが、フズーリーがトルコにおいて民族詩人として高く評価されており、主立った著作はトルコ語以外のものも全て刊行されていることに加え、その書簡などについても研究が進み、その足跡を追いやすい詩人の一人であるためと思われる。

フズーリーは、両イラク遠征(1533~36年)によって、現在のイラクにオスマン朝の支配が及ぶと、即座にオスマン朝の各有力者の庇護を得ようとしている。著者は詩や書簡を用いて、各有力者とのやりとりからその様子を観察する。それによると、フズーリーはまずヒッレに立ち寄ったスレイマン1世に拝謁し、バグダード攻略を讀えたカスィーデを献じてその庇護を期待するが、いくばくかの下賜を与えられたのみであった。また、シャーヒー (Şahî) の雅号で詩人としても知られたバヤズィト王子との書簡の中では、カルバラを捨て、王子のもとに参じてその庇護を受けたい旨を述べ、旅費の工面を願っているが、これも受け入れられなかった。さらにバグダード州モスル県知事アフメット・ベイにも書簡と詩を送り、一時カルバラで彼の庇護を受けている。これらとは別に、職の安堵を期待して嘆願書 ('âruz) をイスタンブルに送り、カルバラのワクフ管財人の職を与えられるが、給金の支払いが滞り、間もなくこの職を去っている。こうした事例から著者は、フズー

リーがパトロンの必要性を強く認識していたとし、当時の詩人にとってパトロンがいかに重要であったかの証左としている。なお、章末では詩人列伝作家のフズーリーに対する評価、フズーリーの散文術と書記術についてなど、パトロン制とは直接関係ない論題についても短い考察が加えられている。

第6章「下賜台帳におけるヒジュラ暦909～917年（西暦1503～11年）年の間に下賜品を賜った詩人たちの出自と職業」では詩史料から離れ、スルタンからの下賜品を記帳した下賜台帳（in‘âm defteri）が基本史料として活用される。資料として、詩人の社会的身分（軍人、ウレマー、書記など）の出自と職業のリスト、詩人に与えられた下賜品のリストが掲載される。

著者は、貧しい時期に自分の詩を「売る」ことでジャーイゼ（câize、詩の対価として与えられる金銭）を得て生活の糧としたザーティーに着目し、詩や著作を売却用の商品とした詩人（satılık bir meta‘ haline getirmiş bir şâir）として、当時では新しいタイプの詩人、すなわち「近代的な詩人／作家」（modern şâir / yazar）の最も古い代表者であると位置づけている。この提言は囁目に値するが、第3章で近代的な観点から古典文学を研究することを批判した著者自身が、「近代的な詩人」という近代的枠組みを適用している点は大きな矛盾である。

次に著者は、詩人に下賜が行われる理由や機会に目を向ける。それによると、週に一回行われる「宮廷の祝祭」や各季節ごとの催しなどの定期的な下賜と共に、戦勝記念やスルタンの戴冠に捧げるカスィーデ、王族や高官、その縁者の死に捧げる挽歌（mersiye）、著作の献呈に対する下賜が行われており、詩人への下賜や金銭的な施しが社会関係の上でも、文芸保護の上でも有効に機能していたとしている。さらに下賜品の内容についても考察が加えられる。「祝祭の施し」（bayramlık）として「詩人たちのスルタン」に「賜衣」（hil‘at、カフタン）が与えられたことに着目し、その色や種類、材質と詩人の序列の関係性にも簡単にではあるが言及し、服飾史の観点からのさらなる研究の必要性を説いている。アッパース朝などでもこうした「賜衣」が下賜されたことを考えると、正鵠を射た提言というべきだろう。以上本書の内容と特徴について簡単に見てきた。

本書は、詩の引用とテキスト解釈を中心とする文学（史）研究の手法に社会学的な視座を取り入れた、革新的なパトロン制研究である。しかし著者本人が「小著」（kitapçığım）⁽⁵⁾と述べている通り、巻末の参考文献を含めても90ページという分量の都合上、物足りない点も散見される。例えば、引用される詩の多くには現代語訳が付されず、解釈が困難で、著者の論理を裏付ける上でも多くの誤解を招く可能性があるように思われる。また史料的には、近年ルドヴァン・ジャヌムによって綿密な研究とラテン文字転写がなされた

ラティーフィーの詩人列伝⁽⁶⁾に当たっていないなど、やや不十分な所も見られた。しかし、様々な観点からパトロン制を考察した本書を研究ノートと位置づけるなら、将来よりまとまった形の研究が上梓される可能性も大いにある。

ここで、本書に対するトルコ国内の反応について簡単に触れておきたい。本書の出版後、主に文学（史）研究者からの苦言が呈され、*Zaman* 紙上でイナルジュク本人も加わる形で議論が展開された。ディーワーン文学の専門家として知られるイスタンブル文化大学文学部教授のイスケンデル・パラ（İskender Pala）はザーティーの例などを取り上げて、「もしある詩人が詩で金を稼いだかったのだとしたら、ディーワーン文学の最良の作品であるガゼルを金で売ったことになってしまう」⁽⁷⁾として、古典文学を「社会経済史」的に考察するイナルジュクの姿勢を批判している。またイナルジュクが詩人を「職業的」に捉えていることに対しても、教養ある様々な階層の人々が詩作を行ったのであり、詩によってだけ糧を得ようとする近代的な詩人とは異なる者たちであった、と反論している。これに対してイナルジュクは、ガゼルやカスィーデが純粋に金銭目的で書かれた訳ではないという点には一定の賛同を示しつつも、「パトロンたちによって貧困に投げ込まれた詩人たちの間には詩を売る者も存在した」⁽⁸⁾と述べ、「今日、西洋の芸術史研究においてはパトロン制の調査と解明が最重要課題になっている。我々の若い文学（史）研究者たち（genç edebiyat tarihçilerimiz）は、このことを経済史家から学ぶことは無かったのである」と、これまでの文学（史）研究の手法を憂いている。このように文学（史）研究者の間に感情的とも取れる反応が見られたことは、古典文学を芸術的、文学的観点からのみ解釈しようとする今日のトルコの文学（史）研究の現状を表しているといえる。その意味で本書を巡る議論はイナルジュクの慧眼を示す結果となった。おそらく著者は、社会経済史家の視点で文学（史）研究の業績に再考察を加えることで、国内の研究者にパトロン制研究の立ち遅れを指摘すると共に、新しい研究手法の可能性を探るための試論として本書を上梓したのでらう。

本書はパトロン制に焦点を絞った研究ではあるが、16世紀の古典詩について、またメジリスなどの詩人とパトロンの世界について概観することが出来る基本文献ともなっている。そして、先に述べた通り批判の余地はあるかも知れないが、パトロン制という論題を通して文学（史）研究と歴史学（あるいは社会史研究）の間に横たわる隔絶を明確に認識し、その橋渡しを試みた優れた研究と言える。

註

- (1) それぞれ、Agâh Sırrı Levend, *Türk Edebiyat Tarihi*. Cilt 1., Ankara:TTK, 1988. 東
Nihat Sami Banarlı, *Resimli Türk Edebiyatı Tarihi: Destanlar 洋
Devrinden Zamanımıza Kadar*. Cilt 1-6., Ankara: Milli Eğitim Bak
anlığı, 1971. 学
(2) Halil İnalçık, “Tanzimat ve Bulgar meselesi,” *Ankara Üniversitesi 報
Dil ve Tarih-Coğrafya Fakültesi Doktora Tezleri Serisi*, Vol. 2, Ankara, 1943.
(3) Halil İnalçık, “Anadoluda Klasik Türk Şiirinin Başlangıcı,”
Türk Dili, 277, 1974.
(4) 神秘主義的メタファーとしてそれぞれ「(神との合一への) 導き手」、
「(神との合一の) 悦び」と解釈するのが一般的である。
(5) Halil İnalçık, “Şair ve Patron Hakkında,” *Zaman Gazetesi*, 12
Haziran 2004.
(6) Latîfi, *Tezkîretü's-şu'arâ ve Tabsîrütü'n-nuzamâ*. Rıdvan Canım
(İnceleme ve Metin), Ankara: Atatürk Kültür Merkezi Başkanlığı,
2000.
(7) İskender Pala, “Divan Şairleri, şiirlerini para için mi yazıyordu?,”
Zaman, 4 Haziran 2004.
(8) 註5に同じ。

Halil İnalçık, *Şair ve Patron: Patrimonyal Devlet ve Sanat Üzerine
Bir Sosyolojik İnceleme* (Ankara: Doğu Batı Yayınları), 2003, 90p.